

インド・テランガーナ分離運動の歴史と現状（上）

山田 桂子

要約

2009年11月末から12月初めにかけて、インド・テランガーナ地方を単独の州にすることを求める大規模な住民運動が発生した。この運動の起源は20世紀初めにまでさかのぼり、歴史的なテランガーナの政治的・社会経済的問題に直結している点で注目に値する。今回10日間にわたって全土で繰り広げられた激しいアジテーションの中心的な担い手は、貧困層や低カースト、マイノリティである。彼らは議会や政党をあてにせず、またかつてのような暴力にも訴えず、文化的なシンボルを用いた多様で新奇な「平和的」アジテーションを次々と編み出した。今回の分離州要求運動は、潜在的宗教性や階級的役割分業の点で、地域アイデンティティと地域政治の将来に暗い影を落としているが、しかしそれらをはらんだ上での、民衆自身の新たな政治参加の始まりとも評価することができる。

はじめに

インド、アーンドラ・プラデーシュ州（Andhra Pradesh、以下AP）、デカン高原の中央にテランガーナ（Telangana）地方がある。2009年11月末、地域政党テランガーナ地域会議（Telangana Rashtra Samithi、以下TRS）の党首チャンドラシェーカル・ラオ（K. Chandrashekar Rao）がAPからの分離、すなわちテランガーナ州の創設を求めて断食を始めた。チャンドラシェーカル・ラオは人気も人望もなく外見も貧相で、政治家としては不遇な道を歩んできた男である。そのような男の芝居じみた行動に当初多くの人々の反応は冷やかであった。ところが間もなく民衆レベルの運動があちこちで発生しはじめ、本当は適当なところで切り上げるつもりでいた彼は予期せぬ大勢の人々や組織から多大な圧力を受け、断食の継続を余儀なくされた。そして12月9日ついにインド政府はテランガーナ州の設置を、「州議会の合意」を条件に認める声明を発表するに至った。

このような展開自体、この運動が何がしかの社会経済的実体に裏付けられた変化の表出ではないかと疑わせるものがある。翌2010年インド政府は問題の全貌を調査し具体的な解決策を提案するため、判事シュリークリシュナ（B. N. Srikrishna）を委員長とする調査委員

会を任命した。委員会は12月末に報告書を提出したが、その内容からもやはりこの問題が主要な政治・社会・経済問題の歴史的交差点にあること、そしてそこへ向かって人々の側からのさまざまな社会運動が合流、または接点を持ったことが読み取れる。

本稿はこのような最近の分離運動にあらわれた在地の人々の「下から」の動きの一端に光をあてることが目的である。前半（上）では運動の前史と背景を述べたうえで2009年の運動を分析する。後半（下）では政府の最終報告書の内容を検討したうえで、テランガーナ問題の全貌について現時点での総括を試みる。

本稿中のカッコ内の日付はすべて英字新聞『ザ・ヒンドゥー』（The Hindu）紙インターネット版の出典を指している。（<http://www.thehindu.com/>）新聞記事は事件よりも1日遅れるので、例えば2009/1/2とある場合実際の事件は前日の2009年1月1日に起こっている。

1. 前史

テランガーナ地方を単独の州にしようという動きは今回が初めてではない。1回目は1952年から1956年まで、つまりAPの前身にあたるアーンドラ州（Andhra State）の設置直前から全インド的言語別州再編成によってAPが創設されるまでの間に起こった一連の出来事である。2回目は1968年から73年の間で、これはジャイ・テランガーナ運動（Jai Telangana movement）からジャイ・アーンドラ運動（Jai Andhra movement）を経て大統領統治がしかれるまでの出来事である。今回の運動は3回目にあたる¹。

今述べたように現在のAPは1956年言語別州再編成によって設置された。それ以前は旧英領のマドラス（Madras）州と旧藩王国のハイダラーバード（Hyderabad）州に分かれており、テランガーナは後者に属していた。一方マドラス州内のテルグ語（Telugu）地域には沿岸のアーンドラ地方と内陸のラーヤラシーマ（Rayalaseema）地方があり、これにテランガーナを加えた3つがテルグ地域の基本的な地域分類である。テルグ語を主要言語とするひとつの歴史文化圏があるという認識は20世紀初頭に英領側の沿岸アーンドラから広まった。アーンドラ運動（Andhra movement）について筆者はこれまで何度か書いて来たのでここでは省略するが²、ここではテランガーナに関して次の点をあらためて指摘したい。

第1は20世紀初めにさかのぼる分離運動の背景である。もともとハイダラーバード藩王国では官僚や役人として外国人（ベンガルやマハーラーシュトラなどのムスリムとヒンドゥー）を招聘する慣行があった。しかし、そのようなエリート移民の流入に対する在地エリートの不満に対処するため、藩王は1919年地元民（Mulki）を優先して雇用する法令を施行した。いわゆるムルキー・ルール（Mulki rule）である。しかしその一方で1920年代以降、農村開発などのためにアーンドラから農民の移住を奨励した。これは肥沃なデルタを持ちイギリスの開発で豊かになったアーンドラに比べ、内陸乾燥地帯でこれといった近代的経済開発もな

い藩王国は「遅れ」をとっていたからである。この藩王の奨励だけが原因ではないが、結果として相対的に高い教育程度と経済力をもったアーンドラからの移民が、隣接するテランガーナに多数流入し、定住した。この流れは現在も続いているばかりか、インドの経済自由化以降加速されている。このようなムルキー・ルールが存在と長期に渡る豊かな移民への反発のふたつは、3回すべての運動に共通する直接の背景である。

第2はインド人意識の問題である。通常インドの現代史は1947年イギリスからの独立をもって始まるのに対し、ハイダラーバード藩王国のそれは1948年9月13日から5日間にわたるインド側の「警察行動」(Police Action)を持ってはじまった。当時藩王はインドへの帰属を決めていなかったからこれは事実上異なる国家間の戦争であり、その結果藩王国は敗戦の末廃止されてインドへ武力併合された。これをインド側は「解放」(liberation)と呼ぶ。当時藩国内ではインド独立運動を率いたインド国民会議派 (Indian National Congress, 以下会議派) やムスリム連盟 (All India Muslim League) の支部などもあったものの、その影響は実際には限られていた。また、テランガーナ一帯にひろく影響を及ぼした地元民衆の運動、伝説的なテランガーナ農民武装闘争 (Telangana peasants armed struggle)³では、指導者の多くがアーンドラ出身の左翼政治家かまたはその影響下にあったが、彼らが藩王支配と封建的土地制度からの解放を英領インドのイギリスからの独立に重ね合わせて藩王国とインドの併合を自明と考える一方で、本物の当事者である地元民、つまり末端の活動家はインド・ナショナリズムの経験を欠いたまま、「警察行動」を機にインド政府と対峙してしまうという現実と直面した。このような経験から、こんにちテランガーナの多くの人々の間で文化的範疇としてのインド人意識はあっても、旧植民地において本来であれば国民統合のカギとなるべき、独立運動の記憶を介して内面化されたインド民族意識というものとは皮相である。このことは、独立インドにおける国家建設のハイライトとも言うべき言語別州再編成に対する旧英領出身者の高い評価が、ここでは必ずしも共有されないことを意味する。

第3はその州再編において最終的なAP設置の経緯と理由が不透明なことである。そもそも統一テルグ州を求める動きは常にテランガーナではなくアーンドラ政治家の主導であった。これは最初のアーンドラ運動のみならず、藩王国併合後1949年にアーンドラ・ラーヤラシーマとテランガーナとの統一を求めて結成された「大アーンドラ会議」(Vishalandhra Maha Sabha) でも同じであった。併合案が特に現実味を帯び出したのは1953年アーンドラ州創設直後からである。この時テルグ人の期待に反してマドラス市がタミル地域に含まれることが決まったため、アーンドラ州の州都はラーヤラシーマ地方のカルヌール (Kurnool) 市に置かれた。しかし、テランガーナにあるハイダラーバード市は16世紀以降王朝の都として発展した歴史都市であり、テルグ地域内で唯一マドラス市に見劣りしない州都としてふさわしいと思われた。テランガーナでアーンドラに反発する最初の運動が起こされたのはこの頃である。すなわち1952年ハイダラーバードとワランガル (Warangal) 県の大学生らが、ムルキー・ルールの徹底と移民の帰還を求めて暴動を起こした。暴動はテランガーナ各地でおおよそ1ヶ

月にわたって継続し、その中で警察の発砲によって数人が死亡した。

その後1953年ハイダラーバード州会議派委員会 (Hyderabad State Congress Committee) はアーンドラ州への併合に反対して独自のテランガーナ州設置を求める決議を下した。このテランガーナ州構想は大アーンドラ運動に見られる言語地域主義や左翼運動の激化を恐れた当時の中央政府首脳部、まさに首相J. ネルーらの思惑とも一致していたから、その実現性は非常に高かったといえる。1948年から49年にインド政府が立て続けに組織した検討委員会のダル委員会 (Dar Commission) とJVP委員会 (JVP Committee) も併合を認めなかった。さらに1955年の州再編委員会 (State Reorganization Committee) は最終結論として、5年の猶予を経た後にハイダラーバード州議会での投票を行い3分の2以上の賛成票を得たのちに併合するよう勧告した。

問題はその後の展開である。勧告後わずか数日のうちにハイダラーバード州議会が勧告に反対してテランガーナとアーンドラ州の併合案に賛同する決議を行った。その後会議派首脳部も併合に賛成を表明するに至って状況は完全に逆転し、APの設置が決定したのである。このような展開の裏に政治家同士のさまざまな工作活動があったことは当然であろう。また中央政府にとっては、テランガーナ農民武装闘争後1952年の総選挙ではアーンドラでもテランガーナでも左翼政治家が多数当選して会議派政権の成立を脅かしたが、1955年の選挙ではアーンドラ州の実現を思いかげず手柄にして人々の心象を良くした会議派が地滑りの勝利をおさめていたので、統一州ができたとしてもそれが反会議派州政権の成立を促す心配がなく、2州並立案に固執する理由は以前より希薄になっていただろう。しかしいずれにせよ、密室政治によるAPの誕生はのちに分離派にひとつの大義名分を与えることになった。それは、今でも政府の公式見解・立場はあくまで州再編委員会勧告のまま、すなわちテランガーナ州の単独設置を認めるものであり、アーンドラ州との併合には正当な根拠がないという主張である⁴。

AP設置に当たり、アーンドラ州とテランガーナ地域代表は紳士協定 (Gentlemen's Agreement) を結び、州財政の分配や経済発展、教育、雇用、農地の取得、大臣ポスト等に関してテランガーナ地元民への配慮や留保を約束した。ところが1968年紳士協定がほとんど守られなかったことが州議会で暴露されたことから、翌1969年にかけて大規模な分離運動、ジャイ・テランガーナ運動が発生した。オスマニア大学の学生や地元のジャーナリスト、公務員らを中心にした激しい暴動によって多数の死傷者や損害が出た。一方、ムルキー・ルールに反発したアーンドラ出身者が、逆に雇用の機会を奪われ差別されているのは自分たちの方だとして制度の無効を訴え裁判を起こした。1972年高裁は訴えを有効と判断したが、その後最高裁に持ち込まれ、そこでは逆にムルキー・ルールは依然合法であるとの判決が下された。このことから、今度はアーンドラの方をテランガーナから分離させようと求めるジャイ・アーンドラ運動が起こされた。州全域にわたる混乱に対し、政府は与党会議派州に大統領統治をしくという異例の対処で事態を取捨させたが、この一連の事件はかつて言語州要求

運動がもっとも激しく、また全国的言語別州再編成の先駆けともなった地域で発生した分離運動であるという点で、衝撃的な事件であった。

2. 2009年の分離運動

(1) 運動発生までの状況

1973年、インド政府はそれまでのムルキー・ルールと最高裁判決を破棄し、新たに6箇条原則（Six Point Formula）を発表した。内容的にはムルキー・ルールの適用範囲を地域や職種によって以前よりも具体的かつ詳細に規定したものである。これによって地元民を優遇するというインド政府の積極的な判断があらためて示されたことになった。また1970年代当時の客観的な情勢として、すでに「移民」の多くが二世や三世になっており「地元民」の定義が困難になっていたということもあり、これ以降、散発的な裁判や反響の乏しい分離派の示威行為以外は、かつてのような激しい分離運動は発生しなくなっていった。そして1980年代になるとカリスマ的映画スターのN. T. ラーマ・ラオ（N. T. Rama Rao）率いる地域主義政党テルグ・デーシャム（Telugu Desam Party、以下TDP）が登場し、州内格差よりも州全体としてのテルグ人意識を強調して、社会経済的問題を根本的には中央—州関係の中で解決するというスタンスを取ったことから、分離要求は一層目立たなくなっていった。この傾向は1990年代インドの経済開放が始まるとさらに強まった。N. T. ラーマ・ラオを継いだ娘婿のチャンドラバブ・ナーイドゥ（N. Chandrababu Naidu）はIT産業を目玉に州の経済自由化を強力に推し進めた。その結果ハイダラーバードとその周辺地域が目覚ましい経済発展を遂げると、テランガーナ分離運動の核心であったムルキー・ルールの是非や地域間格差解消といった問題が、一部の熱心な分離派を別にすれば多くの人々の関心から遠のいていったかのように見えた。しかし、もちろん事実はそうでなかったことが今回の事件によって明らかになったわけである。

今回現実として分離運動が発生したことから遡って考えた場合、一番表層に現れた政党政治レベルの動きとしては、ひとつの事件にたどり着く。それは中央での最初の政権樹立に失敗して野党に回ったインド人民党（Bharatiya Janata Party、以下BJP）が、1997年当時州政権にあり中央でも連立の一角を担っていたTDPに対抗して、テランガーナ分離を支持する姿勢を表明しはじめたことである。その後会議派内部でも分離を主張するフォーラムが結成されるなど、今回の分離運動の伏線となる横断的な動きが起ころしはじめた。もともとBJPはAPでは州議会議席を1～2席持つだけの弱小政党にすぎない。しかし1998年の総選挙でテランガーナ州の実現をマニフェストでうたい、その後中央政権に復帰して2000年ジャールカンドなど3州を新設すると、それが潜在的な分離支持者にあたかもテランガーナ州の実現までも間近であるかのような印象を与えた。当時チャンドラシェーカル・ラオはTDPに所属し

州議会議員で党の要職の経験もあったが、2001年党主で州首相のチャンドラバーブ・ナードゥと対立し、分離州の獲得を目標に掲げてTDPを離党しTRSを組織した。彼の行動は政治権力を得るための方便にすぎないと見られたが、しかし2004年総選挙が迫るとTDPに対抗していた会議派がTRSに働きかけて選挙協力を結んだため、いざ結果的に会議派が中央と州の両方で政権を取ると、協力関係にあったTRSは首尾よく中央と州で連立政権に参画することに成功し、ついに両政権内部から分離州の実現を迫るという事態に発展した。

ただしここで真に重要なのはチャンドラシェーカル・ラオやTRSの動きそのものではない。彼らの動きは氷山の一角であって、同様の分離支持者がBJPはもちろん会議派やTDPなどあらゆる政党や組織を横断して広まっていたことこそが決定的であった。なぜこのような変化が起こったのかは後述の分析に譲る。政治家は例えば自分の政党の中で声高に分離を主張して執行部に圧力をかけ、場合によっては離脱してTRSに党籍変更したりした。このような政党においては内部の分裂を防ぎ外部で新たな支持を獲得するために、とにかく分離に理解ある態度を表明する必要に迫られた。次の2009年総選挙が迫った時、APでは主要8政党のうち5政党、すなわちTRS、BJP、TDP、共産党系の2党CPI(Communist Party of India)とCPM(Communist Party of India, Marxist)が分離に賛成する立場を表明した。人気の映画俳優チランジーヴィ(Chiranjeevi)が旗揚げした新党のPR(Praja Rajyam)と会議派は、積極的に賛成しないが反対もしないという立場をとった。残る1党のムスリム政党AIMIM(All India Majlis-e-Ittehad-ul Muslimeen)は最後まで意見を表明しなかった。総括すると、2009年総選挙の時点において、すべての政党が分離に反対していないという状況が出現したのである。

選挙結果は、会議派が議席を減らしたとはいえ依然圧倒的勝利で政権を維持した。一方前回の選挙時とは異なり会議派との協力関係を打ち切っていたTRSは議席を大幅に減らして惨敗した。しかしこれを分離派の敗北と分析するのは誤りである。もともと会議派は最大の敵TDPとの違いを際立たせるために、経済自由化政策で取り残される貧困層や農民に焦点を

2009年4月州議会選挙結果（カッコ内は前回）

政党名	2009年(2004年)
Indian National Congress (会議派) **	156 (185)
Telugu Desam (TDP) *	92 (47)
Praja Rajyam (PR) **	18 (-)
Telangana Rashtra Samithi (TRS) *	10 (26)
All India Majlis-e-Ittehadul Muslimeen (AIMIM)***	7 (4)
Communist Party of India (CPI) *	4 (6)
Bharatiya Janata Party (BJP) *	2 (2)
Communist Party of India, Marxist (CPM) *	1 (9)
他	4 (15)
	計294議席

*分離賛成 **分離に反対しない ***態度未表明

当て、反貧困、親農民をうたう数々の施策を強調していた⁵。会議派が選挙民の信任を得たのはこの部分である。これらの政策は必然的に貧しいテランガーナにより当てはまったから、その時点で会議派の勝利はテランガーナの人々には前進であったともいえるだろう。ところが選挙後、どの党も分離に反対していなかったにもかかわらず分離に向けての具体的なステップが開始されないとなると、与党会議派は当然、チャンドラシェーカル・ラオも戦略のまづさや利己的な行動が分離を遅らせていると批判を浴びるようになった。彼は移民による不正土地取得問題やハイダラーバード・フリーゾーン問題⁶など、分離州要求に関わる個別的な課題にも取り組んでいたが、政治家としての無能ぶりが揶揄されて風刺画の格好の対象となったり、さらには彼自身が実は移民の子孫であることが明るみに出されて反発を招くなど、分離運動の最高指導者としての人々の信頼獲得（それはまた新州の初代州首相になる可能性を意味する）は難しくなるばかりであった。

11月29日、過去の経験から万が一の事態に備え厳戒態勢を敷いていた警察は、断食に向かう途中のチャンドラシェーカル・ラオを無理やり逮捕した。彼は獄中で断食を開始した。同時に州政府はオスマニア大学とカーカティーヤ大学に特殊部隊（Rapid Action Force）を送り、大学生や市民を拘束しようとして多数の負傷者を出した。この一連の出来事の生々しい様子がメディアを通じて全国に報道されると、チャンドラシェーカル・ラオや学生たちに同情し政府を批判する動きが現れた。最初に大規模な暴動が起こり抗議の自殺者も出るなどしたのはチャンドラシェーカル・ラオや分離州要求のためというより、このような政府の「非人道的（inhuman）」初動に対する怒りであったというのが一般的な理解である（2009/11/30）。政府の行動は、藩王国がインドに併合された時に行使されたのと同じ「警察行動」だとも評された（2009/12/2）。

暴動には走らないまでも、多くの人々は各地でストライキや集会を実施した。しかしその際にチャンドラシェーカル・ラオが移送された先の病院でジュースを飲んだ（＝断食の中止を意味する）ことが知れ渡ると、平和的アジテーションも深刻な抗議行動へと変質した。例えばカリスマ的民謡歌手ガッダル（Gaddar）らはチャンドラシェーカル・ラオが民衆を裏切ったとして声高に謝罪を求めた。オスマニア大学ではさっきまで断食を支持する連続集会が開かれていた会場が、一転して激しい罵声を浴びせる学生たちであふれかえった。チャンドラシェーカル・ラオを模した人形が焼かれ、葬式行列劇が演じられた。怒れる人々が続々と集結して新たな集会へと発展する中、複数の組織による話し合いが行われた。彼らはそこで分離州要求運動を継続することを約束し、政党によらない独自の運動を組織することで一致した（2009/12/1）。同様の大規模集会はワランガルのカーカティーヤ大学でも開かれ、統一行動委員会（Joint Action Committee）は「TRSとは無関係に、チャンドラシェーカル・ラオがやろうとやるまいと、われわれは運動を継続する」と檄を飛ばした（2009/12/2）。断食が再開されたのはその後である。実は彼はこの後も血糖値を下げないための液体を静脈に「自らの意思に反して」注射されたのだが（2009/12/3）、興味深いことにそのニュースはまった

くと言っていいほど誰の関心も引かなかった。その時人々はすでに指導者を見限り、自分たち自身の運動を開始していたのである。

(2) 組織と人々

細かい事態の推移は省略するが、チャンドラシェーカル・ラオ逮捕から冒頭に述べたインド政府の発表までの10日間に、どのような組織や人々が運動を行ったのかを簡単に見ていく。言うまでもなくTRSの活動家たちは率先して各地で集会を開き、ストライキを呼び掛け、アジテーションを行った。合言葉は「ジャイ・テランガーナ」である。それに伴ってバスの焼き打ちや投石、役所などへの放火や器物損壊等々が発生した。各地で州首相ローシャイア (K. Rosaiah) や各党首ら政治家の肖像や人形が焼かれ、インディラ・ガンディーやラジーブ・ガンディーといった過去の代表的会議派政治家や、1952年アーンドラ州の実現を求めて断食死したポッティ・シュリラームル (Potti Sriramulu) の銅像もターゲットにされた。このような暴力沙汰は、しかしながら今回の運動では主流ではない。主流になったのは「平和的 (peace)」アジテーションで、「ジャイ・テランガーナ」を合言葉に罷業や断食、断食リレー、座り込み (dharna)、感情的な演説や歌で盛り上がる集会、鉄道の線路をふさいでダイヤを妨害するレイルロコ (rail roko)、道路をふさいで交通を妨害するラスタロコ (rasta roko)、また後述するような一風変わった示威行動が繰り返されたのが大きな特徴であった。

インド政府が今回の運動について「TRSのコントロール下でない」との見方を示したとおり (2009/12/8)、多くの場面でTRSとは直接関係のない独自の組織の数々が活躍した。その中でもっとも頻繁に登場したのは統一行動委員会 (Joint Action Committee、以下JAC) である。JACは無数あり、その中でオスマニア大学のJACがおそらく最大組織であろう。ただし一般的にJACは必ずしも学生主体ではなく、例えば教育機関の教職員組合や弁護士協会のJACといった職業や職場別のももある。また小さなものから大きなものまで、さらには複数のJACを統合した上位のJACなど実に多くあり、報道ではどれがどれなのか正確に分からない場合も多い。また今回はじめて結成されたものばかりでなく、以前から活動していたものもある。また学生主体の組織としては、BJP傘下の全インド学生会議 (Akhila Bharatiya Vidhyarthi Parishad) がJACとは別にある。これは1968~69年の運動では登場していなかったが、今回は積極的に運動を率先する場面が見られた。

社会人による無数の組合組織は学生以上に運動の中心的組織である。例えばテランガーナ下級公務員中央組合 (Telanaga Non-Gazetted Officers' Central Union) は主に役所や法人の複数の職場組合に呼びかけて罷業 (Pen down strike) を敢行した。彼らのようなある程度の教育ある人々や知識人グループは一大勢力である。法律家や弁護士らによる法廷ストライキやジャーナリストらによるアジテーションは各地で見られた。カリームナガル (Karimnagar) 県では医療従事者のグループが分離運動を支持し政府への抗議の黒バッジを付けて勤務した (2009/12/6)。ワランガル県では詩人や作家が分離運動を盛り上げるために詩の特別朗読会

を開いたりキャンドルを灯す集会を開いたりした（2009/12/7）。

以上の例にあるように、職場や職業別組織はもっとも一般的な動員の単位だったと思われる。テランガーナ各地の炭鉱開発に関わる政府系の炭鉱会社（Singareni Collieries Company Limited）で働く労働者集団は例外的にTRSの影響下にあったが、今回カリームナガル、アーディラーバード（Adilabad）、カンマム（Khammam）、ワランガル4県で断固としたストライキを実施し、政府に多大な損害をもたらした（2009/12/1, 8）。カリームナガル県の複数の自動車学校や保険会社（2009/12/6）、オートドライバー（2009/12/8）、私立学校経営協会（2009/12/9）、県税務弁護士協会（2009/12/10）、マハブーブナガル（Mahbubnagar）県の貧困児童保健施設（Anganwadi）（2009/12/8）、ミルク販売（2009/12/8）、ニザーマーバード（Nizamabad）県のアーリヤ・サマージ協会（2009/12/9）、オートドライバー（2009/12/9）、税務弁護士協会（Tax Association）（2009/12/9）、アーディラーバード県のビーディー工場（2009/12/9）、医療従事者グループなどが報道されている（2009/12/9）。マハブーブナガル県の牛乳販売のグループは道路に大量のミルクを廃棄して政府への抗議を表現した（2009/12/8）。役人のペン・ダウン・ストライキもそうだが、アーディラーバード県の農民による牛車150台の行進（2009/12/8）など、職業・職場別動員はアジテーションを職業ごとに特色あるパフォーマンスで彩ることになった。

このような職業や職場ごとの組織化が、内実ではある程度血縁やカーストといった伝統的コミュニティの紐帯に依っていた可能性はある。カースト協会そのものが露出した例としては、チャンドラシェーカル・ラオの逮捕に関して政府を批判したグループとして政党、市民団体や職場組合と並んで「カースト協会」（caste based-associations）があったと書かれている（2009/11/30）。具体名が出た例では商人カーストのアーリヤ・ヴァイシャ会議（Arya Vysya Mahasabha）がある。アーリヤ・ヴァイシャは1952年断食死したポッティ・シュリラームルのカーストで、今回彼の銅像を傷つけるなど侮辱行為が発生した。協会は事件に遺憾の意を表明し、彼が求めたのはあくまでアーンドラ州の実現でありその後のテランガーナの併合までは主張しなかったと反論した（2009/12/2, 4）。この協会自体は分離賛同派であろう。興味深い後日談として、およそ2年後に同様の事件が起った際銅像のそばに残されたピラに、マドラス市で生まれたポッティ・シュリラームルの代わりに別のテランガーナ出身者でアーリヤ・ヴァイシャの運動家の銅像を置くべきだと書かれていたという事件があった⁷。ピラの作者が同じカースト・メンバーならば、カーストの紐帯に地域別の亀裂があることがわかる。

他のカースト協会名では、12月7日にカリームナガルでBJPを含めた分離派が主導した集会に、伝統的には床屋カーストであるナーイ・ブラーミンの協会（Nayi Brahmins Association）や洗濯人カースト、ラジャカの協会（Rajaka Sangha）が参加したとある（2009/12/8）。同日隣のワランガルで開催された集会にも「カースト別の職業団体」（caste-based vocations）が参加したと書かれている（2009/12/8）。カリームナガルの、伝統的には

工芸人カースト、ヴィシュワ・ブラーミンの協会 (Vishwa Brahmana Sangam) のメンバーは、同じカーストで今回抗議の自殺を遂げたシュリカーント (Srikanth) の名前を掛け声にデモ行進をした (2009/12/9)。また指定カースト、マーディガの組織したマーディガ留保闘争会議 (Madiga Reservation Potala Samithi) の姿もあった (2009/12/9)。

これらカースト協会の例にもあるように、市井の参加者の多くが低カーストやダリトだったことは誰の目にも明らかであった。例えばオスマニア大学JACのリーダー、ピダマルティ・ラヴィ (Pidamarthi Ravi) はもともとダリト運動家で大衆社会党 (Bahujan Samaj Party) の活動家であった。ニザーマーバード県のテランガーナ・ダリト・女性協会 (Telangana Dalitha Mahila Sangh) やカリームナガル県の同様のダリト女性団体 (2009/12/8) のように組織がはっきりとわかる場合もあるが、例えばランガーレッディ (Rangareddy) 県で法廷スト中の法律家らが不可触民解放運動の指導者アンベードカル (B. R. Ambedkar) とジャグジーヴァン・ラーム (Babu Jagjivan Ram) の像に花輪をかけてテランガーナ州の実現を誓ったり (2009/12/4)、カンナム県でテランガーナ・ジャーナリスト・フォーラム (Telangana Journalists' Forum) がアンベードカル像に州要求のメモランダムを添える (2009/12/8)、などといった行動からもダリト運動との関連がわかる。

他のマイノリティ集団では、イスラーム強硬派として知られるインド・イスラーム協会 (the Jamaat-e-Islami Hind) のアーンドラ・オリッサ支部が分離に賛同を表明した (2009/12/8)。カリームナガル県では数百人のムスリムが大きな楽隊を伴ってデモに参加した (2009/12/8)。また遊牧コミュニティの協会 (The Andhra Pradesh All India Banjara Sangh) は分離を支持する決議を行い (2009/12/8)、サンガーレッディ (Sangareddy) 県のトライブ地帯にあるパルグ・タンダ (Palugu Tanda) 村では給食ストが実施された (2009/12/3)。

農民に関しては、前述した農民の牛車行列によるデモ行進の例もあるが、彼らの具体的な組織化や参加実態についての詳細は筆者には今のところ不明である。運動がもっとも盛り上がった地域のひとつカリームナガル県ですら「大学生が休日を利用して農民を啓蒙しに行くことを決めた」などとの報道も見られ (2009/12/4)、報道が都市に偏りがちな面を差し引いて考えても、今回の運動が過去のテランガーナ農民蜂起などとは異なり (しかし過去の分離運動とは同様の) 都市的な性格であったことは疑いないだろう。しかし興味深い例としてはマハブーブナガル県ポーレーパッリ (Polepally) 村の事件があり、ここでは分離支持派によって製薬会社 (Hetero Drugs Limited) が襲撃された (2009/12/8)。また別の例では、農村でのマイクロクレジットを展開する自助グループ (Self Help Group) が大会に参加する例は各地で見られた。

低カーストやダリトと関連するが、今回の運動のひとつの主役はいわゆる「極左」であった。具体的には、ナクサライト (Naxalites) や毛沢東主義派であるマオイスト (Maoist) と呼ばれる組織、人民の力 (Janasakti) や、インド共産党マルクス・レーニン主義 (新民主主義派) (CP-ML(New Democracy)) は表立ってTRSを支持し、一部行動も共にした (2009/11/29,

30, 12/3, 9)。進歩的民主学生連合（Progressive Democratic Students Union）や革命作家協会（Virasam or Revolutionary Writers' Association）も集会に名を連ねた。オスマニア大学のJACと繋がりのあるサンディヤ（Sandhya）は女性進歩協会（Progressive Organisation of Woman）代表で、著名なマオイスト女性運動家である。そしてもっとも代表的で象徴的なのはチャンドラシェーカル・ラオの断食中断を批判した民謡歌手ガッダで、彼自身APでもっとも知られたナクサライトの広告塔、そしてダリト運動家である。

以上のような異なる背景の人々や組織がアジテーションを行う際、別行動をとる例は多い。例えばニザーマーバード市では、BJP傘下の全インド学生会議、テランガーナ・ダリト女性会議、インド共産党マルクス・レーニン主義（新民主主義派）が「別々に」ラスタロコやハンストを実行した（2009/12/6）。アーディラーバード県ではビーディー労働者と医療従事者が共に路上でラスタロコやテランガーナの代表的祭りバトカンマ（Bathukamma）の民謡を歌うなどした（2009/12/9）。しかし路上や街頭ではなく、大学のキャンパスや広場など広い会場で開催される集会ではこれらの組織が一同に会して大集会となった。例えば12月4日のオスマニア大学での集会では、当日が休日だったこともあり各地から多くの人々が集まり、演説や断食リレー、ハンストリレーなど思い思いのデモンストレーションを行った。大学前の道路を端から端までゴロゴロ転がったり、障害学生のグループが3輪車に乗って参加したりした。一部の学生がキャンパスのはずれで政治家の肖像を焼きはじめたが、民謡詩人ガッダが「平和的」アジテーションを呼び掛けるスピーチを行うと暴徒化はおさまった。夕刻になると人々はキャンドルライトで行進した（2009/12/5）。

同日カーカティーヤ大学でも大集会が開催された。学生らがキャンパスでハンストを行う間、そこへ向かって遊牧カーストの権利団体（Lambada Hakkula Porata Samithi）、自助グループ、法律家、画家、ペンキ塗り職人、教職員組合、私立大学の学生など多種多様な集団が各々行列となって各地を行進し、最後はキャンパスで合流してハンスト中の学生を歌や踊りで激励した。芸人、詩人、作家の集団も集結し、人気民謡歌手のヴィマラ（Vimala）やバーラクリシュナ（Rasamayi Balakrishna）もパフォーマンスを披露した（2009/12/5）。

ニザーマーバード県では芸人による歌舞に加えて子どもらによるヨガのパフォーマンスによる「奇抜（novel）」なアジテーションも行われた。そこにはテランガーナ下級公務員組合、TRS、インド共産党マルクス・レーニン主義・新民主主義派、全インド学生会議、マーディガ留保闘争会議、BJPも集合した。彼らの断食リレーにはアーリヤ・サマージ協会やオートドライバーのグループも加わった（2009/12/9）。マハートマー・ガンディー大学のJACが企画した集会では、電話で参加した民謡歌手ガッダがすべての人々の「民主的」参加を呼び掛け、詩人や歌手、芸人らによる文化的プログラムで盛り上がった。ここに複数の政党（BJP、PR、TRS、Bahujana Communist Party）、複数の作家協会（Telangana Rachayithala Vedika、Telangana Vidyavanthula Vedika）、複数の労働組合のリーダーたちが一同に会した（2009/12/4）。

新聞には、アーディラーバード県の運動は「ありとあらゆる場所に」広がったと書かれている(2009/12/4, 8)。またワランガル県でも「ほぼすべての人が参加した」としたうえで、次のように報道している。

学生がテランガーナ分離のアジテーションを開始してから1週間後、ありとあらゆる人々が例外なく運動に参加しているところを目の当たりにすると、その(分離を求める-筆者)感情が、他人が想像するよりも深くまた広範に根付いていることがわかる。農産物市場で働くすべての労働者、仲介業者、商品を運搬する労働者、お茶を運ぶ少年や清掃人らまでが大規模な行進に参加し、イヌマムラ市場からハヌマコンダかそれよりも遠いところにまで進み続ける。それは警察の介入で人々が散り散りになるまで続けられる。数百数千人という児童が、各々の学校の制服を着たまま道路に出てきて県警察署の前で人の鎖を作り、テランガーナ分離賛成を叫んで交通を遮断している。(2009/12/10)

最後に付け加えると、年長の賛同者には過去の分離運動経験者も少なくなく、彼らはしばしば集会に登場して1969年の経験を回顧する感情的なスピーチを披露した(2009/12/3,6)。元大臣コンダ・ラクシュマン・バープージ(Konda Laxman Babuji)は1968~9年の運動と1952年の運動の両方の経験者で、今回運動資金として10万ルピーを学生に献金した(2009/12/3)。また、最初の10日間には出てこないがその直後に分離賛同派として報道された興味深い団体として、移民で構成されるテランガーナ定住者フォーラム(Telangana Settlers' Forum)や、藩王国時代に北インドから移住定着したシク教徒のコミュニティ(Deccan Sikh community)もあった(2009/12/11, 2010/1/14)。さらに今回の運動の反響は海外にも及び、テランガーナ同郷組織(Telangana Development Forum, the All Telangana Non-Resident Indians)などがアメリカやニュージャージー州の公園で集会やハンストを行った(2009/12/1,5)。

以上の様子をあえて一言で言い表すならば、分離支持はさまざまな政党・職業・階級・カースト・宗教・性・コミュニティなどを横断して、ほとんどすべてと言いたくなるほどの実に広く多くのテランガーナの人々の間に及んだ、ということに尽きるだろう。

(3) 「平和的」アジテーションを読み解く

これまでの例に出てきたように、運動の表現スタイルは多様で「奇抜」なものもあった。具体例をさらに追加すると、インド首相とAP州首相への大量投書作戦(2009/12/4)、大臣宅前での半裸デモ(2009/12/6)、街頭看板の「アーンドラ」の文字消去(2009/12/1)、または「テランガーナ」に書換え(2009/12/3)、車体ナンバーの州記号APをTGに塗替え(2009/12/6)、路上カレー・パーティー(2009/12/10)などがある。バリエーションは12月9日の政府声明後一層増加した。例えば若者がサッカーボールに分離反対派の政治家の顔を描いて遊んだり、

人々が勝手に「ジャイ・テランガーナ」のハンコを作って紙幣に押ししたりした。またラスタロコの会場となる路上でのアジテーションは前述のカレー・パーティーに加え、料理、田植え、洗濯、ビーディー巻きなどが実行された⁸。

興味深いのは、このようなスタイルが単なるユーモアや現実と脈絡のない思いつきではない点である。ある研究グループは運動発生から約2カ月の間に運動参加者へのインタビューを行った⁹。それによると、一見「奇抜」な行動も人々が直面している個別かつ具体的な社会経済的問題への意見表明だとわかる。例えばニザーマーバード県で洗濯人カーストの協会（Rajakula Sangham）が村の中心に集まって洗濯物を洗い、それを干してアイロンをかけるというアジテーションを行った。参加者はインタビューでこう答えている。

テランガーナ州が実現すればわたしたちの水問題は解決するだろう。村の貯水池の水は干上がって、もはや洗濯ができない。雨不足だけが原因ではない。ニザームサーガル湖の水を分けてもらわなければならないのに、別の地域に水路を持っていかれてしまった。テランガーナ州の実現を求めるのは、それによってのみ私たちの水問題が解決するからだ。¹⁰

つまり、ラスタロコとして路上で洗濯・乾燥・アイロンがけを行うという示威行為が、水資源をめぐる洗濯業者（カースト）の闘争を表現しているのである。また別の例では、10年間織物をやめていた織工カースト協会（Padmasali Sangham）の人々が奥にしまい込んでいた織機を路上に持ち出してハンガーストライキを行った。彼らは10年前に政府が織工への補助金を停止して以来、雑貨屋やビーディー工場の労働者として働いてきた。彼らが今回織機を出して断食しながら道路をふさいだのは、それが州政府の補助金政策への異議申し立てだからである。彼らは言う。

もしテランガーナ州が実現すれば、私たちは伝統的職業の本来あるべき姿に戻ることができる。そのため闘うつもりだ。私たちには織工としての誇りがある。テランガーナ州が実現すれば、この仕事を続けるための施策が講じられるだろう。¹¹

このようなアジテーションの背後にある具体的な社会経済的文脈こそが、長い間鎮静化の裏で脈々と流れ続けていた分離要求への水脈であり、これがついには互いに合流して地表に流出したのが今回の運動であると考えられる。前節にあげた例で補足すると、テランガーナ下級公務員中央組合のベン・ダウン・ストライキでは分離州獲得がハイダラーバード・フリーゾーンへの反対や過去のムルキー・ルールの徹底・復活に結び付けられた（2009/12/1, 2, 6）。ダリト参加のところで出てきたマーディガ留保闘争会議の場合、この組織は自分たちと同じ指定カーストだが自分たちよりも優位にいて留保制度の恩恵を独占してきたライバル

のマーラ (Mala) と対立し、以前から指定カースト留保枠をさらに細かくABCDの4つに分ける運動を展開してきたことで有名である。トライブのところでは言及した給食ストを行ったパルグ・タンダ村は、以前困窮した家族が自分の幼児や児童を「売る」許可を政府に求めて問題になった地域である (2009/8/21)。農民参加の例で出てきた製菓会社襲撃事件のポーレーパッリ村は経済特区 (Special Economic Zones) で、以前から強引な用地買収と立ち退き問題に対して農民やトライブらの激しい反対運動が起こっている。また自助グループの参加については、APがもともとインドでもっとも自助グループによるマイクロファイナンス取引が盛んであり、それに関連して膨大な負債を抱えた農民の自殺が頻発して問題になったことが思い起こされる¹²。さらに、頻繁にストライキを行って政府に損害を与えた炭鉱労働者集団は、以前から露天掘りの導入による労働者の大量解雇や住人の立ち退き問題で政府と対立していた。

以上の事例は全体の一部にしか過ぎないが、このような社会経済的問題、特に経済特区やダム建設での住民立ち退きや炭鉱労働者の雇用問題、トライブの権利や貧困問題などをもともと直接に引き受け運動して来た組織に、今回の運動でも活躍したテランガーナ統一行動委員会 (Telangana Ikya Karyacharana Committee) がある。2006年の時点でこの委員会の傘下にあった組織は文化団体や政治団体などおよそ30にのぼったという (2006/11/1, 6)。この組織は以前から民謡歌手ガッダルらナクサライトや左翼組織と協働し、労働運動や人権運動の一環として分離を要求するアジテーションを行ってきた。また極左組織も、労働運動や農民運動を分離運動と結び付けようと意識的な努力を行ってきた。そして彼らの行うイベントのもっとも特徴的なものがガッダルら芸能集団によるパフォーマンス、テランガーナ・ドゥームダーム (Telangana dhoom dhaam) である。ドゥームダームは訳すとすれば「ズンチャカ祭り」といった感じだが、これこそがまさに今回各所で開催された「平和的」な「文化的プログラム (cultural program)」の原型であった。

ここでこれまで何度か言及した民謡歌手ガッダルについて若干紹介すると、ガッダル (本名Gummadi Vittal Rao) は1949年ダリトの家族に生まれ、経済的事情でハイダラーバードのカレッジを中退後、工場で肉体労働者として働くなどしながら自らの芸能集団を組織して活動を行っていた。1971年ナクサライト活動家で芸術愛好家協会 (Art Lovers Association) を主宰していたラオ (B. Narsing Rao) に見出されたことがきっかけで彼自身ナクサライト運動に身を投じ、以降在地の民衆的な歌や芝居、踊りのスタイルを借りてダリトやトライブ、後進諸階級、貧農や労働者の社会経済的地位の向上を訴え、革命的左翼思想のプロパガンダを引き受けてきた。一時地下に潜ったがその後はテレビやマスコミに頻繁に登場し、これまでにおよそ3000曲、35本のカセット・テープをリリースしたという。本人の魅力ある個性や芸人としての才能もあって次第にカリスマ的な人気を博すようになり、2000年代に行われた州政府とナクサライトの間の和平交渉ではナクサライト側の代表になった。彼がいつ頃から階級闘争を分離要求に結び付け出したのか、正確なところは筆者には不明だが、少なく

とも1999年に出版した歌集にはテランガーナを讃える歌が収録されている¹³。

ガッダルは分離要求のための催しであれば組織を選ばずドゥームダームを開催し、TRSはもちろんBJPの集会にも出席した。このようにしてドゥームダームは利害の異なる多様な集団の結節点となったが、特に極左組織とヒンドゥー右翼組織がともにドゥームダームで同席する大規模集会は今回が初めてではなく2006年にはすでに見られる（2006/5/29）。さらに言えば、RSSなどコミューナル勢力がテランガーナ分離の熱烈な支持者であることは良く知られている¹⁴。このような極左とヒンドゥー右翼の間の一見矛盾するような近い関係は、APで長い間影響力があった左翼・極左運動が下火になって以降、もしそれが下火にならなかったならば左翼支持者になったであろう現在の青年層のある部分が、ヒンドゥー右翼（BJPやRSS）に吸収されていっていると考えることによってある程度説明がつくだろう。特に学生たちの間でBJP傘下の全インド学生会議がJACとならんで運動の中心的役者であったことはそのことをよく表している。

もちろん、ドゥームダームはそこで地域芸能が演じられるところにポイントがあり、地域アイデンティティに訴える運動であればその地域の文化的シンボルが集団間のちがいを超えて威力を発揮するのは当然ともいえる。ある論者は、今や以前とは比較にならないほど大勢の人々が、自分の日常生活の問題を最後は分離州の実現に結びつけて抗議の自殺に至ってしまうほど、深層心理に深く食い込むような「テランガーナの文化的アイデンティティ」が新しく創造されつつあることを批判的に評した¹⁵。ただし、ここでの問題はそれがE. ホブズボウムの言う「創られた伝統（Invention of tradition）」やB. アンダーソンの「想像の共同体（Imagined community）」であるということにとどまらず、それ以上に宗教的に中立でない点にある。ドゥームダームで人々が興じるバトカンマやブッラカタ（burrakatha）といった芸能は基本的にヒンドゥー教の神話世界のものである。つまり、テランガーナ州が実現することによってヒンドゥー教的でないもの、例えばハイダラーバードを中心とするデカン・イスラームの歴史や文化伝統が見直されたり再評価されたりするという保障はどこにもないのである。そのことは、かつてチャンドラシェーカル・ラオがテランガーナのアイデンティティを文化的多様性や宗教的寛容に結び付けようとして、浅はかにもニザームを持ち出して称揚した時に、即座にガッダルらから一蹴された一件からもよくわかる（2007/12/17）。APの左翼と極左は自らをかつてのムスリム支配、ニザームによる封建支配の打倒を目指したテランガーナ農民武装闘争の継承者であると見なしており、ここに極左とヒンドゥー右翼との大いなる接点がある。

このような分離運動が内包する亀裂はヒンドゥーとイスラームの間だけでなく、カースト（や階級）関係にもある。ドゥームダームを頂点とする「平和的」アジテーションは、政党政治や議会政治を腐敗した非民主主義的なものだと見なす極左の考えから編み出されたもので、彼らは政党や議会というチャンネルを通さずに民衆の示威行為が直接政策決定者を動かすというスタイルを主張してきた。かつてその示威行為は武力行使の形をとったが、今回

それが「平和的」アジテーションに変わったという点が異なるものの、政党や議会をあてにしないという点では変わらないばかりか、ますます多くの人々の賛同を得ているように見える。例えば運動発生から半年以上過ぎた時点でテランガーナ中ほぼすべての村にJACが設立されたが、それらはどの政党にも属さない教師や法律家が組織していると言われる¹⁶。またオスマニア大学のJACがのちにTRSと直接関係を持つようになったとき、その部分は「ポリティカルJAC」と呼ばれ元のJAC本体とは組織上明確に区別された。さらにさきに引用したインタビューを行ったグループは、政治家主導ではない民衆独自のアジテーションのスタイルについて、「民主主義や直接行動という意味について考え抜かれた新しい政治の登場」であると評価し、60年代の運動とは全く質的に異なる「民主テランガーナ」への運動であると高く評している¹⁷。

もちろんこれには批判もある。著名な研究者でダリト運動家のカンチャ・イライア (Kancha Ilaiah) は、人々がドゥームダームにふけることは逆に政党政治や議会政治を上位カーストの領域とする一方でダリトや低カースト、マイノリティを芸能や文化の領域への押し込めるものだと警鐘を鳴らす。彼によれば、バトカンマやブツラカタはもともとダリトや低カースト、マイノリティの文化で上位カーストからは軽蔑の対象だった。ところが今や上位カーストの政治家や活動家は相変わらず政党や議会といった政治の表舞台を牛耳ったまま、今度は文化の領域にまで進出し主導権を奪いつつあると批判し、それゆえテランガーナ州の実現は結局従来の上位カースト中心の社会を変えることはないとして分離そのものに反対している¹⁸。ここには、先に指摘した地域アイデンティティの創造とコミュニズムの危険性と並んで、分離運動がはらむもうひとつの大きな問題がある。

「平和的」アジテーションについて最後に一点付け加えると、「平和的」アジテーションがこれほど広範に展開された直接の理由が垣間見えたケースが今回ふたつあった。第1は11月29日にアーディラーバードで行われたあるレイルロコである。ムンバイ発ナーグプル行きナンディグラム (Nandigram) 急行はアーディラーバード駅に定刻よりも20~30分早く到着するのが常だったため、この列車をめがけて行うレイルロコは便利なターゲットであった。なぜならレイルロコを開始する時にはすでに列車は通過済みなので、立派にアジテーションを行える上に実害をもたらして逮捕される心配がないからである。ところがその日に限って列車は定刻より25分遅れ到着した。レイルロコを企画した全インド学生会議の活動家6人が逮捕、起訴された。この失敗以来アーディラーバードでレイルロコは低調になったといわれ、裁判にかけられた活動家の後悔の弁は愉快的エピソードとして新聞に報道された(2009/12/10)。

この例からわかることは、暴力そのものへの否定というよりは一般人が違法行為で捕まり裁判沙汰になった場合に自らが蒙るであろう一連の物理的・精神的負担に対して、正直な恐怖を吐露することが今では容易になっていることである。20年も前であれば、もともと極左への共感が強かった土地柄でこのような弱気な感情が暴力を放棄する真面目な理由となり

えたかどうか疑わしい。ここでは暴力はほかに異議申し立ての手段を持たない究極の弱者にとって正当な手段であるとすら信じられて来た歴史がある。しかし、このレイルロコの企画者がナクサライトでなく全インド学生会議だったことは示唆的である。つまり極左以外の人々が参入して運動が拡大して行く過程で誰もが目の当たりにしたのは、これまで本当は逆に暴力によって政治参加から排除されてきた人々、すなわち長年政府・警察と極左との間で繰り広げられてきた血も凍るような暴力の応酬に行き場をなくし、政府や政党政治に失望や疎外感を持っていた人々の、そのあまりの数の多さと存在感の大きさであった。「平和的」手法のプレセンスの高まりは、前述したような運動の潜在的宗教性やカースト・階級性という危険をはらんだ上での、彼ら自身の新たな政治参加の始まりと捉えることができよう。

この点と密接に関連するのだが、第2は今回たびたび見られた州の人権委員会（the State Human Rights Commission）の介入である。インドは1993年に全国的に人権委員会を法制度化し、各州に設置した。チャンドラシェーカル・ラオの逮捕直後最初にオスマニア大学で学生らと警察の衝突が起きた時、警察を撤収させたのは州人権委員会の指示であった（2009/11/30）。また翌日オスマニア大学では学生らが暴徒化しそうになったが、それを制止したJACの戒めの言葉は、暴力に訴えれば同じ「人権委員会の矛先が、今度は自分たちに跳ね返ってくるかもしれない」という脅し文句であった（結局この日感情的な演説や歌で「平和的」アジテーションは7時間に及んだ）（2009/12/1）。このような、順番としては最初に誰か被害者や目撃者の訴え→人権委員会の介入→「行き過ぎ」た警察の制止と撤収→事態の終息、というサイクルは他の日にも見られた（2009/12/8）。

今回、「平和的」運動が「民主的（democratic）」と呼ばれる場面はあっても、チャンドラシェーカル・ラオが「ガンディーの手法（Gandhian path）」と呼んだ例（2009/11/30）を除けば、「非暴力」と表現されることがほとんどなかったのは、前述の例に象徴されるような「人権」への目配りや意識化が理由だと思われる。つまり、こんにち政治や暴力を問題にする文脈、すなわち民衆運動がその観客として想定しているのは人権や人道、市民などといったキーワードが流通するグローバルな言語世界であり、それは着実に人々の中に根を下ろしつつある。例えば、1997年から2005年まで政府とナクサライトの和平交渉を仲介したのは、「憂慮する市民の会（the Committee for Concerned Citizens）」であった。彼らは暴力を弱者の武器ではなく透明性や思考力を奪う政治文化だと再定義し、それを「成熟した、人道的で透明性のある革命実践」と対置させる。そして和平交渉自体は失敗したが、停戦期間をもうけることで人々が怯えることなく政治的意見を表明できる「民主的な空間」を一時的にでも実現した¹⁹。大衆的な「平和的」運動の意義は、このような1990年代以降のさまざまな社会の変化の文脈の中で、今一度踏み込んで再考する必要があるだろう。

Notes

- 1 テランガーナ分離運動の歴史についての主な先行研究には次のものがある（出版年順）。B. Duncan Forrester, 'Subregionalism in India: The Case of Telangana,' in *Pacific Affairs*, Spring 1970, vol. 43, no. 1, pp. 5~21. K. Seshadri, 'The Telangana Agitation and the Politics of Andhra Pradesh,' in *Indian Journal of Political Science*, vol. xxxi, no. 1, 1970, pp. 60~81. Hugh Gray, 'The Demand for a Separate Telangana State in India,' in *Asian Survey*, vol. 11, no. 4, 1971, pp. 463~74. Dagmar Bernstorff, "Eclipse of 'Reddy-Raj'? The Attempted Restructuring of the Congress Party Leadership in Andhra Pradesh," in *Asian Survey*, vol.13, no.10, 1973, pp. 959~79. Hugh Gray, 'The Failure of the Demand for a Separate Andhra State,' *Asian Survey*, vol. 14, no. 4, 1974, pp. 338~49. Dagmar Bernstorff, 'Region and Nation: The Telangana Movement's Dual Identity,' in David Taylor and Malcolm Yapp eds., *Political identity in South Asia*, London: Center for South Asian Studies, SOAS, University of London, 1979, pp. 138~50. G. Ram Reddy and B.A.V. Sharma eds., *State Government and Politics, Andhra Pradesh*, New Delhi: Starling Publications, 1979. G. Ram Reddy and B.A.V. Sharma, *Regionalism in India: A Study of Telangana*, New Delhi: Concept Publishing Company, 1979. S. Simhadri and P. L. Vishweshwer Rao eds., *Telangana: Dimensions of Underdevelopment*, Secunderabad: Centre for Telangana Studies, 1997. 三輪博樹「インドにおける政党政治と地域主義—テランガーナ州創設運動を事例として—」、近藤則夫編『インド民主主義体制のゆくえ 挑戦と変容』アジア経済研究所、2009年、195~229頁。
- 2 拙稿「20世紀インドのアーンドラ地方における言語州要求運動」『史学雑誌』98編12号、1989年、48~70頁。「言語は民族を統一できるか—アーンドラ地方の民族主義—」、辛島昇編『ドラヴィダの世界—インド入門II』東大出版会、1994年、429~41頁。「テルグ語とアーンドラ人の近代」、辛島昇編『世界歴史大系 南アジア史3 南インド』、山川出版社、2007年、306~16頁。
- 3 1946年から51年にかけてテランガーナ地方の各地で展開された共産主義者主導の農民武装闘争。当初は強制労働や封建的土地制度の廃止を目的として藩王国政府と戦っていたが、「警察行動」以降はインド政府の大弾圧によって鎮圧された。
- 4 例えばガッダルの発言にも見られる。分離派は1955年州再編委員会の勧告はいまだ成就されていないという理由で、テランガーナ問題を他の分離州運動と同列に並べて新たな全国的州再編を行う第2州再編委員会（the Second States Reorganization Commission）案に反対している。（*The Hindu*, 2006/10/15, 2008/2/5）
- 5 州首相（会議派）のラージャシェーカラ・レッディ（Y.S. Rajasekhara Reddy）はライバル、TDPのチャンドラバブ・ナードゥが「州の最高経営責任者（CEO of State）」と評されたのに対して「農民の友（friend of farmers）」と形容された。Jalayagnam（灌漑拡大事業）、Arogiyasri（健康保険）、Indiramma（農村・都市再生計画）、Pavala Vaddi（自助グループへの低金利ローン）、電力無料化、1キロ2ルピー米などの看板政策があった。
- 6 1973年の6箇条原則ではテランガーナの公務員採用でのムルキー・ルールを定めているが、1975年大統領令第14項（f）において、ハイダラーバード市はこのルールに拘束されずAPの他地域出身者も平等に公募に応じられる「フリーゾーン」と定められた。分離派はこの大統領令14項（f）の削除を求めており、それに対してアーンドラとラヤラシマ出身者はフリーゾーン維持を求めている。
- 7 *Siasat*, 2011/2/17. (<http://www.siasat.com/english/news/potti-sriramulu-statue-damaged-city>, 2013/4/8取得)
- 8 Madhavi Tata, 'Colours of Riot, Creative stirs keep the T-word ticking in AP,' in *Outlook*, 2010/2/15.
- 9 Kalpana Kannabiran, Sagari R. Ramdas, N. Madhusudhan, S. Ashalatha, M. Pavan Kumar, 'On the Telangana Trail,' in *Economic and Political Weekly*, March 27, 2010 (vol. xlv, no. 13), pp. 69~82.
- 10 *ibid.*, p. 73.
- 11 *ibid.*, p. 74.
- 12 S. Nagesh Kumar, 'New loan sharks,' *Frontline*, vol.27, Issue 24, 2010.

- 13 P. Kesava Kumar, 'Popular Culture and Ideology: The Phenomenon of Gaddar,' in *Economic and Political Weekly*, Feb. 13, 2010 (vol.xlv, no.7), 2010, p. 61~67.
- 14 Kalpana Kannabiran, op cit., p. 70.
- 15 Anant Maringanti, 'Telangana: Righting Historical Wrongs or Getting the Future Right?', in *Economic and Political Weekly*, January 23, 2010 (vol. xlv, no. 4), p. 15.
- 16 K. Srinivasulu, D. Satyanarayana, 'By-elections and Telangana Agitation', in *Economic and Political Weekly*, Aug 14 (vol. xlv, no. 33), 2010, p. 13.
- 17 Kalpana Kannabiran, op. cit., pp. 69~70.
- 18 Kancha Ilaiah, 'Telangana dreams sours,' in *Deccan Chronicle*, 2010/2/13, republished in Telangana Utsav Committee HP (<http://telanganautsav.wordpress.com/2010/02/13/telangana-dream-sours-kancha-ilaiah/2013/5/23>取得)
- 19 Anant Maringanti, 'Talks between the Maoists and the State: Learning from the Andhra Experience,' in *Economic and Political Weekly*, Aug 21, 2010 (vol. xlv, no. 34), pp. 39~45.